

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 8 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520915

研究課題名(和文) 中期ビザンツ帝国におけるテーマ制の総合的研究

研究課題名(英文) comprehensive study of the theme system in the Middle Byzantine Period

研究代表者

中谷 功治 (NAKATANI, Koji)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30217749

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：「中期ビザンツ帝国におけるテーマ制の総合的研究」では、8世紀を中心とするビザンツの皇帝政府について、それが「小アジアのテーマに支えられた政権」であったとの仮説を設定した上で、7世紀から9世紀前半にかけて頻発したテーマが引き起こした反乱に注目し、これらを詳しく分析することを通じて、提示した仮説である「小アジアのテーマに支えられた政権」の成立と崩壊のプロセスを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This study proposed a hypothesis that the Byzantine government in the 8th century was directly supported by the themes, army corps or military districts, in the Asia Minor, and tried to make clear the hypothesis, or the process of formation and fall of the government, by analyzing the theme-revolts which frequently happened in this period.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：テーマ制 テマ反乱 テマ コンスタンティノーブル ビザンツ

1. 研究開始当初の背景

7世紀から11世紀の中期ビザンツ帝国の歴史において、封建制論と並んで活発な議論を呼んだものにテマ制の起源論争があった。しかし、この論争は情報不足を主な原因として、1970年代に行き詰まりを見せた。1980年代には、R.-J.リーリエが防衛システムとしてのテマの役割について実証研究を著したが、これに対し研究代表者は同時期に多発したテマによる反乱に注目し、テマと政権との関係性について考察を加えた。テマそのものに関する研究は、その後はあまり目立っていない。けれども、最近の中期ビザンツ研究における注目点として、軍事史研究の活発化を挙げることができる。例えば、前世紀末以降に、W.トレッドゴールドの『ビザンツ帝国とその軍隊 284-1081年』、J.F.ハルドンの『ビザンツ社会における戦争・国家・社会 565-1204年』をはじめとする軍事関連の諸研究、W.E.ケーギ Jr.による『ビザンツ軍事争乱』、『ビザンツと初期イスラーム征服』などの研究が次々と刊行されている。

言うまでもなく、中期帝国においてテマ制度は地方統治の根幹にあり、軍事・行政史上において重要な位置を占めている。それだけに、これら一連の成果をテマという視点から再考察し、帝国が帯びることになる軍事色の淵源を探ることは、ビザンツ国家の性格を明らかにするためにも必要な作業である。

最近の研究史においてさらに注目すべき点として、プロソポグラフィ研究の進展が挙げられる。前世紀後半に旧東ドイツで始まったデータベースの構築は、今世紀に入って『中期ビザンツ時代のプロソポグラフィ』の第1期(641-867年)としてまとめられ、現在は続く第2期(867-1025年)が準備中である。この人物誌的成果を踏まえることで、7世紀から9世紀中頃について、網羅的な研究を実施することが可能となった。

これまで研究代表者は、テマ反乱の分析に続き、テマと皇帝政権との関係を扱ういくつかの論文を発表してきた。さらに、最近では科学研究費補助金を受けて、テマと対をなす存在で、首都近郊に駐在する近衛連隊「タグマ」の形成過程と軍事力について分析を加えた。現在は、海上兵力である艦隊とそれらの「海のテマ」の展開へと考察範囲を広げつつある。従来の研究では、ビザンツ帝国史上の転換期として、地中海世界の大変動期でもある7世紀に焦点が集まりがちであったが、この枠を超えた研究視点が求められている。実際、中期ビザンツ国家が一応の完成形を見せるのは9世紀中頃である。7世紀の変動に加えて、8世紀以降の政治過程をより詳しく分析し、中期ビザンツ国家の形成を論じる必要があるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、7世紀以降の中期ビザンツ国家が、いちじるしく軍事面を重視した構造をもつ

に至った原因について、当時の帝国の軍事行政の基本単位である「テマ」が果たした役割を通じて解明を試みるものである。具体的には、テマ制の軍事面での役割と政権への関与という二つの側面からの分析をもとに、中期ビザンツ国家の性格が決定づけられていく政治プロセスの明確化に努めた。それは同時に、後期ローマ帝国以来の軍事行政制度の変遷過程を実証的に跡づける作業でもある。また、本研究の成果として、高校世界史の教科書に登場するテマ制に関する記述の修正をもあわせて目指すことにしたい。

3. 研究の方法

本研究では、7世紀から9世紀前半にいたる時期を「テマ反乱の時代」ととらえ、政権の交代・継承に際し、それに関与した人物や勢力を各皇帝の治世ごとに網羅的に洗い出す。そこから、(仮説)「8世紀におけるテマ政権の成立・展開」のプロセスを跡づける。同時に、このプロセスで帝国各地のテマが果たした役割を検証する(その際、帝国艦隊の「海のテマ」への再編成の考察をも実施する)。さらに、8世紀末から9世紀前半にかけて進行した、中央政府による権力掌握のプロセスと、それを実現に導くことになる、いわゆる「テマの改革」について詳しく分析を加える。

(1) 考察の視角の転換: 「イコノクラスムの時代」ではなく「テマ反乱の時代」

従来、7世紀は重大な転換期として個別に考察がなされ、8世紀から9世紀前半は別途宗教論争に関連づけて「イコノクラスムの時代」として論じられるのが通例であった。研究代表者は、このような分断された視角ではなく、また宗教面に偏った視点ではなく、両者を「テマ反乱の時代」として一括して捉えることで、当時の帝国の軍事や政治面での動向の把握を目指す。

(2) テマ反乱という視角

転換期としての7世紀だけに注目するのではなく、より長いスパンでの時代の変化・流れの抽出をめざす。

具体的には、テマの多面的な役割を把握する。すなわち、テマ制度の起源論争ではなくテマの主に軍団としての具体的な活動を重視する。とりわけ、テマ軍団の動向と皇帝政権の関係という視点から時代を捉えなおす。

軍事史・人物誌(プロソポグラフィ)研究の成果の積極的活用。

基本史料となるギリシア語での年代記記述のみならず、断片的だが無視できない他国の情報やさらに考古学などから逐次新たな情報が提供されている貨幣や印章史料をももれなく十分に活用する。

軍事史の成果

近年の海洋史研究の深化を受けて、そこからビザンツ艦隊(海軍)についての研究の進展をめざす。それは、陸上でのテマ軍団に対する、海上でのもうひとつのテマとして「海

のテーマ」を分析し、そのテーマ制への編成をさぐる。

政権構造の分析

おもにプロソポグラフィ研究の成果を活用する。万単位で発見されている鉛の印章からは、特定の時代の官職者の氏名や爵位をすることができ、そこからは中央政府の活動の変遷、ならびに地方の属州行政のあり方を探ることができる。

4. 研究成果

本研究の成果は、本年、大阪大学文学部研究科に提出予定の博士請求論文「テーマ反乱とビザンツ帝国」となる予定である。本報告書提出時点で、すでにその最終章を除く全体は一応の完成を見ている。以下では本論文の(1)概要、(2)内容構成、(3)各章での議論の概略を紹介する。

(1) 本研究の概要

本研究は7世紀から9世紀前半のビザンツ帝国の政治過程を、テーマとのかかわりを中心に考察するものである。テーマ *thema* (複数形 *themata*) とは、考察の対象時期においては軍団を意味することが多いが、同時に軍団が防衛を担当する地域、すなわち軍管区をも意味した。さらに9世紀中頃にはテーマは帝国統治上の行政区画としても整備されることになる。そこでは、テーマ軍団の司令官である将軍(ストラテゴス *stratēgos*)は担当区域の行政上の最高責任者でもあった。これが中期ビザンツ帝国の地方行政の要であるテーマ制である。テーマ制度の起源をめぐっては、20世紀なかばを中心に活発な議論が展開されたが、本論文は具体的なテーマ軍団の活動の分析を通じて、テーマ制の成立過程の解明をめざす。

本研究が提示する仮説は次の3点に集約される。

8世紀の20年頃から80年頃まで、皇帝の治世でいえばレオン3世(717-41年)と彼の息子コンスタンティノス4世(741-75年)さらに孫のレオン5世(775-80年)にかけて、ビザンツ領の中核といえる小アジアに配置されたテーマ軍団が、皇帝政府による国政運営を根底で支える態勢が形成された。この緊急事態対応型の政権は一種の軍事政権の色彩を帯びたものであった。

レオン4世妃イレネが摂政をつとめた時期(780-790年)から9世紀初頭のニケフォロス1世(在位802-11年)・ミカエル1世(在位811-3年)の治世にかけて、コンスタンティノープル政府は小アジアのテーマ軍団の影響からの脱却をはかり、さらにこれらを統制下に置こうと試みた。紆余曲折はあったものの、テーマの行政区画化はテオフィロス帝の治世(829-42年)の終わりまでにおおむね達成された。

以上のような政治プロセスを前提にこの時代をとらえるならば、テーマ制と一般に称さ

れる中期ビザンツの軍事・行政制度が成立する上での大きな画期が8世紀初頭にあった。

以上3つの論旨について説得力をもって提示するためには、本来であればコンスタンティノープルを中心とした政権の内部構造を詳しく分析し、その性格を明らかにする必要があるだろう。けれども、8世紀は地中海世界の転換期である7世紀と同じく史料状況においてあまり恵まれてはおらず、上記の目的を直接に達成することは困難である。そこで本論文では、7世紀後半から9世紀初頭にかけて何度も勃発した小アジアのテーマ軍団による反乱を分析対象の中心にすえて、テーマ軍団の動向から中央政府のあり方を探ることにする。同時に、可能なかぎりにおいてであるが、テーマ反乱が発生した時期に加えて、その前後の時代におけるコンスタンティノープルの中央政府が果たした役割についてもあわせて考察し、その一環として属州に展開するテーマ軍団と対をなす存在で、首都近郊に駐屯する軍事力のタグマ(*tagma*, 複数形 *tagmata*)についても、その成立や役割について明らかにする。以上の考察は、これまで明確な結論が出ていないテーマ制の起源について有益なヒントを与えてくれるはずである。

(2) 本研究のまとめとしての博士論文「テーマ反乱とビザンツ帝国」の構成

序章 イントロダクション

1 問題提起

1-1. タクティコンに見るテーマ將軍の優越

1-2. 軍民両権の統合

1-3. 篡奪と軍事反乱

2 時代設定

3 研究史と考察対象

3-1. オストロゴルスキーとテーマ起源論争

3-2. 日本における研究

3-3. テーマをめぐる研究のその後

3-4. 7世紀以前の軍事不安とテーマ反乱の違い

4 史料と考察手法

4-1. 「テーマ」という用語の使用をめぐって

4-2. 史料について

4-3. 史料解釈や記述についての態度

第1章 テーマ軍団の登場とテーマ反乱の展開

1-1. 後期ローマ帝国における軍事行政制度の概要

1-2. テーマ軍団の起源について

1-3. 7世紀の政治情勢

1-4. テーマ軍団による反乱：レオン3世登極以前

1-5. テーマ軍団による反乱：レオン3世登極以後

1-6. テーマ反乱の特徴

第2章 7・8世紀におけるビザンツ中央政府の動向 元老院を中心に

- 2-1. 後期ローマ帝国と元老院
- 2-2. 『テオファネス年代記』と元老院
- 2-3. ニケフォロスの『簡略歴史』と元老院
- 2-4. コンスタンティノーブル元老院の動向

第3章ビザンツ艦隊をめぐる考察

- 7世紀後半 - 8世紀初頭を中心に -

- 3-1. ビザンツ海軍成立期の史料状況と諸問題
- 3-2. コンスタンス2世・コンスタンティノス4世と艦隊
- 3-3. ユスティニアノス2世からテオドシオス3世までの艦隊
- 3-4. レオン3世と艦隊

補論ビザンツ海軍の起源

quaesturaexercitus をめぐって

- 1. quaestorexercitus とは何者か
- 2. カラビシアノイ艦隊との関係をめぐって
- 3. 考察のまとめ

第4章レオン3世政権の成立 テマ軍団の動向を中心に

- 4-1. 7世紀後半のテマ軍団
- 4-2. 「混乱の20年」とテマ軍団
- 4-3. レオン3世治下の動向
- 4-4. アルタバスドスの反乱

第5章8世紀後半のビザンツ帝国

エイレネ政権の性格をめぐって

- 5-1. テマに支えられた政権
 - 5-2. エイレネの政権
 - 5-2-1. 摂政エイレネ (780-790年)
 - 5-2-2. 女帝エイレネ (797-802年)
- おわりに ニケフォロス1世政権の誕生

第6章タグマについて

8世紀ビザンツにおける近衛連隊の誕生

- 6-1. 『テオファネス年代記』とタグマ
 - 6-1-1. タグマの言及
 - 6-1-2. スコライ (スコラリオス)
 - 6-1-3. エクスクビテス (エクスクビトレス)
- 6-2. タグマ連隊の成立とその役割
- 6-3. ビグラとヒカナトイ連隊

補論タグマの兵力をめぐって

中期ビザンツ帝国における「中央軍」

- 1. イスラーム地理学者からの情報
- 2. ビザンツ史料からの推測

第7章イサウリア朝下の陰謀事件をめぐって 8世紀のコンスタンティノーブル

- 7-1. 首都における陰謀の展開
- 7-2. 若干の考察

第8章ビザンツ帝国のバルカン半島政策 (8世紀後半 - 9世紀初頭)

ニケフォロス1世の戦死を考える

- 8-1. 8世紀のバルカン半島情勢への視角
- 8-2. コンスタンティノス5世とブルガリア戦争

8-2-1. 7世紀諸帝のバルカン政策

- 8-2-2. コンスタンティノス5世 (在位741-775年)
- 8-2-3. レオン4世 (775-780年)
- 8-3. 母エイレネと息子コンスタンティノス
 - 8-3-1. エイレネ (摂政780-790年)
 - 8-3-2. コンスタンティノス6世 (在位780-97年)
- 8-4. ニケフォロス1世とバルカン半島
 - 8-4-1. 東方からバルカン半島へ
 - 8-4-2. ストリュモン川地域をめぐって
- 8-5. 親征をする皇帝

第9章9世紀初頭における帝位継承とテマ反乱 スラヴ人トマスの乱を中心に

- 9-1. はじめに：ある伝説から
- 9-2. 将軍バルダネスとテマ反乱
- 9-3. レオン5世とミカエル2世の即位
 - 9-3-1. レオン5世 (在位813-20年)
 - 9-3-2. ミカエル2世 (在位820-29年)
- 9-4. スラヴ人トマスの乱 (821-3年): 最後のテマ反乱
- 9-5. テマ軍団による反乱：レオン3世登極以前
- 9-6. テマ軍団による反乱：レオン3世登極以後
- 9-7. テマ反乱の特徴

第10章テマ制の起源を再考する

- 10-1. 主要史料の確認
- 10-2. 研究史の概要
- 10-3. テマ自生論とその批判
- 10-4. ザッカマンによる検証
- 10-5. テマ反乱とテマ制の起源

(3) 各章での議論の概略

あらかじめ述べておくと、本論文での各章は史料実証による堅実な議論から説得力のある結論を導くようにはあまり展開しない。残念なことであるが、各章での結論はあくまで一定の見通しを示すにすぎないケースが多い。それらは本論全体を通してのより大きな仮説である「小アジアを中心とするテマ軍団に支えられた政権」について示唆するにとどまる。

すでに見たように、残された史料や研究史からは、7・8世紀のビザンツ帝国について高い実証性に裏付けられた説得力のある議論は期待できそうにない。そこで、本論文では従来の研究とは違ってより長い時間の流れの中で地道に考察を進め、論証度の低い仮説を積み上げることで、一定の方向性を示すことを目指した。

まず第1章「テマ軍団の登場とテマ反乱の展開」では、後期ローマ帝国の軍事制度からテマ軍団誕生の経緯をたどり、その上でテマ反乱全体を概観し、「テマ反乱」という概念の定義にもとづいて「小アジアのテマ軍団に支えられた政権」という本論文の中心仮説について紹介した。あわせて7世紀以降におけ

る政治における軍隊の役割の変化についても確認した。

第2章「7・8世紀におけるビザンツ中央政府の動向 元老院を中心に」は、テマ反乱の時代に先行する時期と7・8世紀のテマ反乱の時代における政治過程を元老院の動向を中心に考察する。とりわけ7世紀前半におけるコンスタンティノーブルの中央政府や首都がこれまではたしてきた役割の把握につとめた。これはテマ反乱の個別分析に入る前の予備考察にあたり、これによりいまだテマ軍団が国政への介入を本格化させる前の時期の政治過程を確認した。

第3章「ビザンツ艦隊をめぐる考察 7世紀後半～8世紀初頭を中心に」では、7世紀末から8世紀初頭にかけての帝国政治に重大な影響をおよぼした艦隊の実態に迫る。それは後の「海のテマ」の成立への過程を概観することである上に、この時期にあつて軍隊などの動向が史料からどの程度まで把握が可能なのか、その実情や限界について認識することになる。本章はまた、7世紀後半からレオン3世の政権成立(717年)にいたる政治プロセスをビザンツ海軍という主題を通じてたどる試みでもある。

なお本章末尾に、補論「ビザンツ海軍の起源 *quaestura exercitus* をめぐって」と題して、6世紀にユスティニアヌス1世によって設置されたユニークな行政区画を取り上げ、後に成立するビザンツ海軍や海のテマとの関係について考察した。

第4章「レオン3世政権の成立 テマ軍団の動向を中心に」は、7世紀末からのコンスタンティノーブル政府の混乱を取り上げ、そこからレオン3世による政権成立の背景を明らかにした。「小アジアのテマ軍団に支えられた政権」の成立という本論文が提示する仮説の可能性と不明瞭なまま残された点がより明確なものとなった。

第5章「8世紀後半のビザンツ エイレネ政権の性格をめぐる」では「小アジアのテマに支えられた政権」という体制の動揺のプロセスをあとづけた。主な考察対象となるのは、息子コンスタンティノス6世の親政期を間にはさんだエイレネ摂政・女帝期における小アジアのテマ軍団と首都コンスタンティノーブル政府との確執である。

第6章「タグマについて - 8世紀ビザンツにおける近衛連隊の誕生 -」では、この時期において首都での陰謀事件に深く関与した、8世紀中頃に編成された近衛連隊(タグマ)について考察した。首都やその周辺に駐留することから、これまで地方のテマ軍団に対抗するために創設された中央の戦力と考えられてきたタグマの実像に迫った。

また補論「タグマの兵力をめぐる考察 中期ビザンツ帝国における「中央軍」」において、実際のタグマの兵力規模を明確にすることで、中央軍と呼ばれるタグマの現実の姿がより明確なものとなる。

第7章「イサウリア朝下の陰謀事件をめぐる 8世紀のコンスタンティノーブル」では、レオン3世から女帝エイレネにいたる、いわゆるイサウリア朝期における首都コンスタンティノーブルの政治動向をこの時期に発生した陰謀事件を手がかりに分析する。これは不明な点が多い中央政府の実態を把握するための試みであり、ここからは地方のテマ軍団とのかかわりの乏しい首都独自の動きが見てとれることができた。

第8章「ビザンツ帝国のバルカン半島政策 (8世紀後半～9世紀初頭) ニケフォロス1世の戦死を考える」は、女帝エイレネが退陣した後の帝国政府のあり方を、篡奪帝ニケフォロス1世の対ブルガリア政策を手がかりに考察する。そこでは中央集権の再確立と皇帝親政、バルカン半島での領土回復と植民政策など8世紀後半以降の帝国政府の動向もあわせて分析対象となった。

第9章「9世紀初頭における帝位継承とテマ反乱 スラヴ人トマスを中心に」では、事実上最後のテマ反乱となるスラヴ人トマスが引き起こした大規模な反乱が主な考察の対象となる。これまでの時期とは異なり史料情報にめぐまれ、それゆえ単独の反乱として研究史上において例外的に注目されたこの出来事について、プロソポグラフィ研究の手法を活用しつつ反乱に先立つレオン5世やミカエル2世の政権獲得にいたる政権内の動向を追うことにする。あわせてテマ反乱の終息の意味について独自の考察を加えた。

以上の各章での議論をうけて、第10章「テマ制の起源を再考する」は7～8世紀の政治情勢をふまえつつ、テマ制の成立における画期となる時期について論じた。そこでは井上浩一氏がかつて提唱した「テマ自生説」が重要なヒントの役割をはたすことになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

中谷功治、イサウリア王朝下の陰謀事件をめぐる - 8世紀のコンスタンティノーブル -、歴史家年報、査読有、9、2014、印刷中(6月刊行予定)

中谷功治、ビザンツ海軍の起源 *quaesturaexercitus* をめぐって、人文論究、査読無、63-1、2013、1-13

中谷功治、テマ制の起源を再考する、西洋史学、査読有、244、2012、1-18

中谷功治、7・8世紀におけるビザンツ中央政府の動向 - 元老院を中心に -、人文論究、査読無、62-1、2012、1-18

中谷功治、テマ反乱についての覚え書き、関学西洋史論集、査読無、35、2012、63-74

中谷功治、ビザンツ艦隊をめぐる考察 7世紀後半 - 8世紀初頭を中心に、史林、

査読有、94-4、2011、71-88

〔学会発表〕(計1件)

・日本ビザンツ学会第9回大会(立命館大学)
2011年9月11日
中谷功治「テマ制の起源について：再考」

〔図書〕(計1件)

・井上浩一・根津由喜夫・足立広明・小林功・
中谷功治・竹部隆昌・小田昭善・高田良太著
『ビザンツ交流と共生の千年帝国』(昭和堂,
2013年)71-92頁。

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

中谷功治 (NAKATANI, Koji)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30217749